



## 四国ブロッククラブネットワークアクション 2018 開催報告

日 時： [1日目] 平成30年11月10日（土） 13:00 ～ 17:30

[2日目] 平成30年11月11日（日） 9:00 ～ 12:00

会 場：高知県立人権啓発センター

内 容：テーマ:みんなで考えるこれからの地域スポーツ

[1日目]

1. 共通プログラム「シンポジウム『障がい者スポーツについて』」

2. 事例発表「障がい者スポーツに取り組むクラブ」

「中学校運動部活動と総合型クラブの連携について」

[2日目]

1. 講演・グループワーク「これからの地域スポーツ」

参加者：58名

### 【概要】

本年度は「みんなで考えるこれからの地域スポーツ」をテーマに、障がい者スポーツやこれからの総合型クラブの在り方をみんなで模索していく内容となりました。

1日目は、共通プログラムのシンポジウムを通して、四国各県のパネリストが現場で行っている活動の事例を発表しながら「障がい」への考え方について参加者に伝え、フロアでディスカッションしました。また、後半の事例発表では、実際に障がい者スポーツを行っているクラブの事例と運動部活動と総合型クラブの連携を行っているクラブの事例から、これからの総合型クラブの在り方について考える機会となりました。

2日目は、講演・グループワークを通じて、これまでの総合型クラブ活動に留まることなく、これからの社会（IoT [Internet of Things] で全ての人とモノがつながる社会）を見据えながら、総合型クラブから今までにない新たな価値を生み出し、どう地域課題等に向きあっていくかを考えました。

2日間を通じて、「障がい者スポーツ」や「学校部活動との連携」を通じたスポーツ環境づくりや、これからの時代にコミットする総合型クラブの在り方など、参加者全員で考えることで四国のつながりをより深めることができました。

### 【内容】

[1日目]

#### ◎共通プログラム「シンポジウム『障がい者スポーツについて』」

障がい者スポーツをテーマにした共通プログラムも3年目となりました。本年度は各県で障がい者スポーツに携わる方々から自身の活動を「する視点」や「支える視点」など様々な視点から捉えての事例発表をしてもらいました。

#### □愛媛県：幸田裕司氏（一般社団法人愛媛県ネットワーク協会代表理事）

愛媛県障がい者スポーツ協会では、パラアスリートや競技団体のニーズを企業、大学等とマッチングし、民間からの継続的なサポートをコーディネートする役割を担う「パラスポーツ・コーディネーター」を委嘱しています。全国障害者スポーツ大会において、「精神障害者レクバレーボール」や「精神障がい者フットサル」で活躍し、地域交流も盛んに行っています。

#### □香川県：毛利公一氏（社会福祉法人ラーフ理事長）

私は、棒高跳びの選手として活躍していましたが、アメリカへの留学中に事故に遭い脊髄を損傷しました。現在、香川県パラ陸上競技協会理事を務めており、選手ではなく運営の方で障がい者スポーツに関わっています。私は障がい者ではなく、壁に挑む『障壁者』であると思っています。2020年東京オリンピックに、陸上棒高跳びの審判として出場したいという目標があります。そのために、審判ライセンスの昇級や審判用の機器の開発など準備を進めております。

#### □徳島県：西上勝氏（徳島ウィングス代表）

私は、3歳で交通事故にあい脊髄を損傷し、就職をしてから岡山県で車いすバスケットボールを行っていました。36歳の頃、高知県で身体障害者野球チーム「高知ニューフレンズ」が出来たのを機に入団しました。2014年に「徳島県で身体障害者野球を普及するために徳島県で開催してはどうか」という「高知ニューフレンズ」からの提案があり、「徳島ウィングス」が誕生しました。はじめは、活動場所を確保するのに苦労しましたが、徳島新聞に活動が取り上げられ徐々に仲間が増えました。今では月6~7回、毎回10名近く集まり精力的に活動しております。ボランティアの方々も増え、地域との交流もさかんに行っています。

#### □高知県：片岡優世氏（一般社団法人Uプロジェクト代表）

私は、総合型クラブとしての「高知チャレンジドクラブ」、経営体としての「(一社)Uプロジェクト」の双方で活動しています。活動を通して、総合型クラブの理念の素晴らしさを感じつつも、資金面が追いつかずクラブを持続することの難しさを痛感し、同時に職業として成立させる事の重要性を認識しました。そのため、Uプロジェクトの経営では、「能力・業績給」を導入し、独自の年金制度を設けています。将来は、福祉とスポーツの融合施設をつくり、より地域にコミットした活動をしていきたいと考えています。

#### □まとめ／齊藤栄嗣氏（四国ブロッククラブネットワークアクション2018 副実行委員長）

2016年のリオパラリンピックから、メディアによる選手の取り上げ方が福祉目線からアスリートとしての評価へと変わりつつあります。少子高齢化が進む中、2020年後に向け、障がいの有無に関係なく一人一人が輝ける「共生社会」の実現が急務となっています。このシンポジウムを通して、スポーツは、人と人を理解させる力を持っており、総合型クラブが共生社会実現の一翼を担っていく可能性を大いに秘めていると改めて実感しました。



#### □事例発表①「障がい者スポーツに取り組むクラブ」

##### 田中孝児氏（高知県：まほろばクラブ南国アシスタントマネジャー）

高知県では、H30年度から新規事業として「地域スポーツハブ展開事業」に取り組んでいます。現在、南国市、土佐市、土佐清水市、四万十町の4市町で実施し、地域スポーツの情報を一元化して、地域に還元する事を目的としています。

南国市では、社会福祉協議会、市スポーツ推進委員連絡協議会、市体育協会、高知県・高知県体育協会、民間企業等の各団体が月1回集まり、情報交換を行っています。クラブとしては、市生涯学習課との連携のきっかけになり、同課から小中学校の体育館使用情報が得られるなどメリットがあります。このような連携のもと、障がい者スポーツの教室や体験会を実施しています。

## □事例発表②「中学校運動部活動と総合型地域スポーツクラブの連携について」

篠原昌也氏（愛媛県：ONO スポーツクラブクラブマネジャー）

ONO スポーツクラブが立ち上がった経緯は、元々ボランティア団体として活動していた地元有志に行政からクラブとして立ち上げないかと声がかかったのがきっかけです。現在本クラブでは、スポーツ少年団退団後と中学校運動部活動入部までの間をスムーズに連携させるための取り組みを進めています。この取り組みにより小学校の時期から中学校との交流が生まれ、いわゆる「中一ギャップ」の解消に貢献できるのではないかと考えています。

連携していく上で重要なことは、学校長はもちろんのこと、現場の先生や保護者からできるだけ多く意見を聞くことです。まず学校が抱える問題を知り、自分達で解決できることなのか否か検討します。その上で、クラブから学校へ提案及び依頼する際には、「学校側（生徒にとって）へのメリット」を明確に伝えることが大切だと思います。



## □講演・グループワーク「これからの地域スポーツ」

長積仁氏（立命館大学教授）

私は、今回のお話を通して、参加者の皆さんにこれまでの総合型クラブの在り方を見つめ直し、スポーツと地域のバージョンアップを図ってもらいたいと思っています。周囲の方々に自分のクラブの紹介を簡潔にしてみてください。なかなか難しいとは思いますが、これを機にクラブ創設時の想い、クラブの存在意義（ミッションとビジョン）を見直してみてください。

現在、実施されているプログラムが、自分たちの想いに沿ったものかどうかを確認し、これまでの総合型クラブの活動を「型」として捉え、それを「破」って行ってほしい（千利休の概念「守破離」）。これからの総合型クラブの活動として何を価値として提供できるかを、プログラムの中に落とし込んでいく必要があると思います。具体的な視点としては、定式化した遊びの横行によって失われつつある「想像・創造する遊び」に着目したり、科学技術政策（内閣府）「society5.0」のように変化の本質を理解し、意思決定することが大切です。

今までの常識を打ち破るからこそ面白いのです。ここでいう「面白い」とは「いままで受け入れられていた当たり前の考えを否定すること」です。是非総合型クラブの皆さんをはじめ、地域の方々とコミットして、今あるものを大切にしつつ、新しいもの（価値）を作り出してほしいと思います。



## □全体まとめ／齋藤栄嗣氏

「既成概念を捨て、自分たちを含め誰もが楽しいことを起こす」事が大切であると感じました。四国の各地域にそれぞれの課題がありますが、それに対して地域の総合型クラブが真摯に取り組む事で、地域が幸せになれると思います。

総合型クラブは、トップダウンのピラミッドではなく、各々のクラブを都道府県連絡協議会やSC全国ネットワークといったクラブネットワークでつなぐことが改めて重要であると感じました。

## 【まとめ】

テーマ「みんなで考えるこれからの地域スポーツ」について、障がい者スポーツ、中学校運動部活動に実際に携わる取組について情報提供、意見交換が交わされました。

障がい者スポーツ協会、社会福祉法人、一般社団法人、任意クラブ等、様々なスタイルでの活動報告の発表があり、地域スポーツの在りかたと活動のつながりについて考えることができました。

グループワークについては、クラブの活動が、地域の方々とコミットして、今あるものを大切にしつつ、新しい価値を作り出すことが、これからの地域スポーツには欠かせない考え方だと、気づききっかけとなりました。

(四国ブロッククラブネットワークアクション実行委員長 武市 光徳)

※本ネットワークアクションは、東京 2020 応援プログラム(スポーツ・健康)として実施しました。

